

文語の苑

メールマガジン第十四号（平成二十四年八月）

N次元空間

六十年近く前経済企画庁に勤務せる頃隣の課に東大数学出の課長補佐ありき。しばしば昼食を共にす。或るとき余問ひて曰く、貴公東大にて数学を学びしに何故に役人となりしや。彼答へて曰く、学友との雑談を通じて彼等がN次元の空間を視得ること明らかとなりぬ。かかる秀才に伍して数学により身を立つること能はざるを知る、企画庁に来れる所以なりと。

時は流れて余クウエイトにあり。偶々国際数学会同地にて開かれ、さる東大教授來科す。一日教授を大使公邸に招く。食後の世間話に興ずるうち企画庁の課長補佐の話を憶出で、教授に之を語る。教授暫し黙しやがて語り出せるは、我はN次元空間を視ることを得べし。されどそが曲るときは不可なりと。

更に二十年余を経て後日譚あり。藤原正彦教授の協力を得んと文語の苑の幹部数名御茶ノ水女子大学数学研究室に同教授を訪れしことあり。用件を了へて雑談中何余気なくこれを話題にす。教授打笑みて曰く、課長補佐の判断に誤りなし。N次元を視ることを得ずんば数学を以つてたつきと為すこと思ひも寄らず、我は曲れる空間をも能くこれを視ると。更に続けて言ふ。人間の脳は不可思議なるものなり、絶えず同一対象に思考を重ねればいづれはその対象、レアリティを帯ぶるに至る。例へば諸君は虚数は数学者の妄想の産物にして如何なる実体も有せずと思ふべし、されど数学者にとりてはそは其処なる卓や湯呑と何等変らざるレアリティを有すと。

その後再び同教授を訪れしとき、彼印度の著名なる数学者ラーマーヌジャンについて語りぬ。ラーマーヌジャンは南印度の出身、高校を出たるのみなれど数学の才に秀で、その才を惜しむ周囲の者の努力により、ケンブリッジ大学の数学教授の招くところとなる。英国へ渡りて後ラーマーヌジャン毎朝研究室に現はるるや前夜に発見せし新定理を教授に報告す。二年に一度新定理を見出さば一廉の学者として通用する世界なれば、ラーマーヌジャンの日報は驚くべきことなり。一躍学会の注目を浴ぶるに至る。後日さる人彼に如何にしてかかることの可なるやを問ふ。彼答へて曰く、夜就寝にあたりさる女神に祈りを捧ぐるに女神必ず新たなる定理を授くるなりと。

N次元空間の中には常人の与り知らぬ、否、知る能はざるかかる次元も存すべし。余年来密教修行を日課とするも之またかかる次元への接近と心得べきか。

文語の苑

メールマガジン第十四号

小倉百人一首 十四 大江千里

月見ればちぢにもものこそ悲しけれ わが身ひとつの秋にはあらねど

大江家は菅原道真の菅原家に近く、平安時代から鎌倉時代に続く漢学者・儒学者の家です。菅原家が中国風に菅家と言ふ(う)のに対し大江家は江家と言ひ(い)ます。百人一首に選ばれた大江家の歌人は、この大江千里のほか院政期の大学者、大江匡房があります。高名の女流歌人、和泉式部も大江家の出身です。また現代に近い人では永井荷風が、祖先を溯れば大江家に連なると言は(わ)れます。

大江千里の父は大江音人といふ(う)第一級の学者で、在原業平の父の安保親王が若い頃、侍女に生ませた庶子だったと言は(わ)れます。この子は学問の家の大江家に養子に出され、傑出した学識によって出世し、三位の位まで昇進して後世から大江家の始祖と目されます。その子大江千里は官途の出世ははかばかしくなく、六位止まりでした。ただこの人は漢学の素養とともに、漢詩の一節の意味を託した和歌を読むのを得意としたや(よ)うです。

この歌は唐の白楽天の次の七言絶句の最後の二句に拠って(い)ます。

満窓明月満簾霜 満窓の明月満簾の霜

被冷燈残払臥床 被(掛け布団)は冷く燈は残(消えて)臥床を払ふ

燕子樓中霜月色 燕子樓中霜月の色

秋来為只一人長 秋来って只一人の為に長きや

白楽天があるとき、中国中部の徐州といふ(う)町に旧知の故人で、生前尚書、つまり大臣の位にまで昇進した張といふ(う)人の家を訪ねたところ、眇眇(めんめん)といふ(う)故人の愛妾が主人の死後十年になるのによそに嫁入りせず、邸内の一角に燕子樓といふ小樓を建ててもらってそこに籠り、故人を弔って(い)ます。上の詩はそのことを知った詩人が、感心して作った絶句の一つです。霜の降りる晩秋の夜、掛け布団がすっかり冷くなって起きると、窓一杯に月が明るく、窓のすだれの上には一面の霜、燈火が消えて燕子樓の中に晩秋の冷い月の光が差込んで(い)る、また秋が来た、この秋はわたし一人のためにだけ長いのだら(ろ)うか、といった意味の詩です。

大江千里の歌は、この中の最後の二句の心を、眇眇に成り代って詠んだ歌の趣があります。難しい字句の無い素直な歌ですし、誰にも感銘の伝は(わ)る良い歌です。漢詩の心を読んだと云っても、この歌を口誦む人にそんなことは感じさせません。大江千里にもう一つ、漢詩に想を得たよく知られる歌があります。「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜に如くものぞなき」です。この歌から源氏物語の花宴の巻の冒頭、春の宮廷の宴の後朧月夜内侍がこの歌を口誦んで歩いて来て光源氏と出逢ふ(う)印象的な場面を思出す人が(お)られるでせ(しよ)う。この歌は、白楽天の「嘉陵春夜詩」の「不明不暗朧朧月 明るからず暗からず朧朧の月」に基づくと言は(わ)れます。源氏物語の時代には、百年以上経った昔の大江千里のこの歌が人口に膾炙して(い)たのでせ(しよ)う。

文語の苑

メールマガジン第十四号

君に二心わがあらめやも

愛國百人一首を讀む(十)

山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心わがあらめやも

源實朝

たとひ山が裂け、海が干上り浅くなる、そんな世になつたとしても、大君(後鳥羽上皇)に對する叛きの心を私がつことなどあらうか、いやそんなことはない。

上の句の「山はさけ」の「さけ」は下二段動詞「裂く」の連用形、「海はあせなむ」の「あせなむ」は下二段動詞「浅す」(浅くなる)の未然、連用同型でこの場合は連用形、これに完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」に推量の助動詞「む」の連體形が接續、全體として「世」の連體修飾節を形成してゐます。下の句「二心」は叛きの心で、表面上はその心を隠すので、心が二となることを示します。「あらめやも」はラ行變格活用動詞「あり」の未然形に意志、推量の助動詞「む」の已然形「め」に詠歎を込めた反語の上代終助詞「やも」が接續したもので、あらうか、いやないの意味になります。この形は山上憶良の有名な歌

銀も金も玉も何せむに優れる寶子にしかめやも

の「しかめやも」(子に「若く」(匹敵する)「ほどの寶があらうか、いやない」と同型です。

實朝は初めて鎌倉に武家政權の幕府を開いた頼朝の實子として、僅か十二歳で幕府第三代の將軍となります。和歌を藤原定家に師事して、主として新古今調の歌にその才能を發揮しますが、右の「やも」の使用に見られるやうに萬葉調の歌にむしる本領があります。柿本人麻呂に代表される天皇との濃やかな愛情に包まれた遠い奈良時代の國柄に思ひを馳せてゐたのでせう。しかしその國柄と武家政權との兩立を計ることは、若い實朝の實力を越えてをり、二十七歳で右大臣となる異例の昇進を遂げたものの、翌承久元年(一一二九)正月、その拜賀のため鶴岡八幡宮に參詣の折、甥の公曉に刺されて絶命します。

定家は實朝のこの思ひを汲取り、小倉百人一首の第九十三首目に、

世の中は常にもがもな渚漕ぐ海人の小舟の綱手かなしも

この世の中が變らずに續いて欲しいものだ、見れば海人が漁から歸り來て、家族も總出で舟に綱を掛けて渚に上げようとしてゐる、何と平和で愛すべきこの世の中よ

を鎌倉右大臣の歌として採録しました。これも萬葉調ですが、實は定家が歌論の書として、「或る高貴の人」へ書き送つたとされる毎月抄の中に一應初歩の段階を越えたら萬葉調も學ぶべしとあることから、宛先は實朝ではないかとも考へられるのですが、その日附が承久元年七月二日で、既に實朝の死後半年後のためあり得ないこととなります。

太宰治が名作「右大臣實朝」を發表したのは愛國百人一首刊行の翌年、昭和十八年でした。

文語の苑

メールマガジン第十四号

文語歌曲「うつくしき」(明治小學唱歌集)

明治は日本の歴史の中で奇跡の時代と言つて過言ではありませんが、その一例が「音楽取調係」です。明治五年に公布された學制では、音楽(唱歌)が科目にとりあげられました。一國の政治構造が大變化を起さうとしてゐるその初めに音楽教育が大事と意識されたのです。しかし邦樂の樂器は俗であると卻けられましたが、さりとて學校に備へるべき樂器がまだ日本には無かつたため、「唱歌 當分之ヲ虧ク」とされます。そして明治十二年になつて教育令において「音楽取調係」が設けられました。東西の音樂の折衷が目標でしたが、そもそも音樂は「人心ヲ正シ風化ヲ助クル妙用アリ」で、徳育を養ふものと考へられました。一方、歐化政策を進め、西洋を學ぶには外國語を學ばなければならず、そのためには文法が大切だとの認識が強まつてきます。更に一國の獨立には辭書が必要といふところから、辭書編纂に不可欠な文法にも意がはらはれ、國語の文法の整備も重要とされました。

ここに唱歌の歌詞の方向が定つて行きます。音樂として洗煉されたものであると同時に、文法、語彙を含む國語の教育にも役立ち、詩として風格のある文學的なものでならなければならぬとされたのです。そのやうな経緯から「音楽取調係」、後の東京音樂學校、現在の東京藝術大學音樂學部の係員達は、アメリカ力で多少の音樂に接した長の伊澤修二を除き、ほとんどが國語學者であつたことは異とするに足りません。國語や漢文の讀本、歴史や修身の本などを書いてをり、文法書を編纂したりしてゐた人々です。唱歌に「いろは歌」を入れるかどうかで激しい論争をしてゐますが、結局は「いろは歌」は採用されませんでした。學制の公布にもなつて學校教科書の整備が急務となり、歴史的假名遣の採用、いろはより五十音圖による國語理解の方向に向つたことも影響してゐると思はれます。

發足二年經つて日本最初の音樂教科書「小學唱歌集」が刊行されましたが、その歌詞は音楽取調係の係員の作つたものでしたが、個人名は出されてゐません。

その十八番が「うつくしき」で、稻垣千穎(ちかい)が、スコットランド民謡の歌詞を下敷にして書いたものです。戦場の戀人を歌つたものを、稻垣は近衛兵の三兄弟に置換へました。

一、うつくしき、わが子やいづこ。うつくしき、わが長(かみ)の子は。
弓とりて、君のみさきに、勇みたちて、別れゆきにけり。
二、うつくしき、わが子やいづこ。うつくしき、わが中の子は。
太刀帯(は)きて、君のみもとに、勇みたちて、別れゆきにけり。
三、うつくしき、わが子やいづこ。うつくしき、わが末の子は。
ほこ執りて、君のみあとに、勇みたちて、別れゆきにけり。

*うつくしき 古語としては「愛し」で「かはい、いとしい」が第一義です。

*太刀帯きて「帯きて」を漢字に當てると、「佩く、履く、穿く、着く」で、刀を身に着けること。

文語の苑

メールマガジン第十四号

文語動詞の命令形

學生時代に、完了の助動詞「り」は、「四段活用」に附く場合は已然形接續「だ」と習いましたが、上代特殊假名遣の研究から、實は「命令形接續」であつたことが明らかになつてゐます。ただ、平安以後は、四段活用の已然形と命令形は同じ形ですので、どちらと考へても現實の不都合は起りません。現在の大學入試などでは、いづれも正解としてゐるやうです。

これを教へたら、ある生徒が「ぢやあ、命令の意味があつたのですか」と訊きました。

さうではありません。已然形や命令形は「第五活用形／第六活用形」と名付けた方が正確だと思ふのですが、別段、活用形自體に「已に然うなつてゐる」とか「命令」とかの意味があるわけではないのです。結果的にはさういふニュアンスを帯びてゐるといふ事實はありますが、基本的には、他の單語がどのやうに接續するかを決めるだけの存在なのです。

命令形に別の考察を加へてみませう。

四段活用、例へば「書く」の命令形は「書け」。下二段活用、例へば「据ゑ」の命令形は「据ゑよ」と習ひました。後者は文法書によつては「据ゑよ」としてゐるものもあります。

この分析は論理的ではありません。

「書く」だつて、「書け」でなく、「書けよ」と命令することもあるのです。「よ」は助詞です。ただ、四段活用の場合は「よ」が附くことが少なく、下二段／上二段／力變／サ變などの場合にはそれが附くことが多いので、「書け」「据ゑよ」と分析してゐるだけの話。

実際には、四段は「書け」、下二段は「据ゑ」が命令形と考へるはうが論理的であり、現實に下二段などに「よ」を伴はない例も見られません。

力變の「來」は、特にその例が頻繁に出て來ます。

新古今和歌集の西行の歌に次のやうなものがあります。

訪め來かし梅盛りなる我が宿を疎きも人はをりにこそよれ

下の句は、「遠慮する」の場合によるものである。梅がこんなに綺麗な我が宿を訪問するのに、遠慮なんかしてはいけません」といふこと。

「訪め來かし」は「訪ねて來い」ですが、何と読むのでせう。

「かし」は、命令や斷定につける強意の助詞で、軍歌「軍艦」(軍艦行進曲)にある「真鐵まがねのその船、日の本に、仇なす國を、攻めよかし」でも使はれてゐます

「訪ねる」は古語では「とむ」と言ひました。

語源的には、「もとむ(求)」「とふ(問)」と關聯があるでせう。従つて、「訪め」は「とめ」。

「とむ」の連用形です。「訪め來」といふ複合動詞を作つてゐると考へてもいいでせう。

「來かし」は命令形に「かし」がついてゐるのですから、「こかし」です。

つまり、「こ」だけで、命令形を作つてゐます。

複合動詞と考へるのなら、「訪め來」といふ命令形です。

結局、「訪め來かし」は「とめこかし」と讀むことになります。

右の例は「よ」の代りに「かし」といふ助詞が附いてゐましたが、今度は助詞の附いてゐない、裸の命令形。やはり新古今和歌集の次の歌。作者は藤原雅經まさつねです。

古郷ふるさとの今日の面影誘ひ來と月にぞ契る小夜こよの中山

これももちろん、「誘ひ來」を「さそひこ」と讀んでゐます。

霸旅の歌ですが、旅先で、小夜の中山を訪れ、「都の知人たちの様子を知らせてくれ」と月に頼んでゐるのです。

月に頼むといふことは、「月の表面に戀しい人たちの顔を映し出してくれ」といふことです。

「來」だけで、命令の意味になつてをり、「よ」「も」「かし」も附いてゐません。

「來」の命令形は「こ」であり、「こよ」ではないといふ事實に注目して下さい。

「こよ」といふ形もありますが、それは、命令形の「こ」に、助詞の「よ」が附いてゐるに過ぎないのです。

文語の苑

メーラムガジン第十四号

小泉厚生大臣の折

小泉厚生大臣の折、行政用語よりカタカナ語極力減ずべしと指示あり、リハビリテーションは如何にと下問あり、能く定着したれば変更の要無からむと復答せるとぞ。中国にありては康復と訳し、韓国にありては再活と訳す。こは医学用語たるリハビリテーションを翻訳せるものと理解す。

医療現場にてリハビリテーションの用語を初めて使用したるは一九一七年のことなりき。即ち当時まで医学用語に非ずして、譬へば異端者として裁かれたるジャンヌダルク名譽回復を果たせる、この名譽回復をリハビリテーションの語にて表現す。即ち医療に名譽回復なる理念を持ち込みたること今日的に大いなる意義齎せりと云ひ得。更にはリハビリテーションなる言葉現はれたり。小児須く何事も新規に獲得せるばかりとなれば、リハビリテーションより「リ」を除きたり。余、或るリハビリテーション施設視察したる折、女性の部長余を指して曰く、家庭にて何もなし得ることなければすべてがリハビリテーション也と。

三十年前の我が国にありて、リハビリテーションなる用語、既に大方の世人の使ふところとなり。当時、リハビリテーションこれ何ぞやと尋ぬれば、世人応へて曰く、骨折の後関節の曲げ伸ばし、これリハビリテーション也。脳卒中にて半身麻痺となりぬれば、歩行訓練受く、これ亦リハビリテーション也と。これらいづれも誤りにあらず、それにもまして世界保健機関の統計に拠るに先進国、発展途上国問はず、斯くの如きリハビリテーションの需要年を追ふことに増したり。されど、この三十年間、障害(disability)なる言葉の理念大いなる変貌を遂げたり。

障害の定義、本来成し得ることを妨ぐる要因たるに、三十年以前まで概ね身体的欠損に求めんとするが主流なり。その後の議論に拠りて、それは個人の側にも亦環境の側にもありて、個人と環境の不調和に拠りて顕現すとなれり。依りて障害克服の理念も亦、個人の側にも環境の側にも整備の必要ありとする考へに移行せり。斯くの如き理念机上の空論にあらずして、バリアフリーとして具体的実例となれり。三十年前に歩くこと叶はざる者の電車通勤思ひ描くことすらなし。今日、両脚を失ひし者毎日通勤するは日常の光景に成れり。加へて障害の理解斯くの如く変はりたるに連れ、精神或いは知能といふ目に見えざる人体機能の障害(disorder)にも光が当たるに及び。かくして高次脳機能障害、発達障害など今日世上にてしばしば話題に上る。更に、新たな障害生まれつつあること、深く認識せしむるに至れり。五体満足にありてIT機器の使用し得ざれば耳目を塞ぐに変はりなしと云へばいくらかの理解をば得んと思ふ。

さて、障害克服の帰結、障害をもつ者社会に出づることに極まれり。リハビリテーションなる用語、訓練に留まらず社会復帰果たすまでの過程にある諸問題すべて解決するための手段に意味擴大し、これにて人間としての名譽回復なる本来の語義に重なり。かくてリハビリテーション、学問として極めて学際的領域に変貌を遂げ、日常での運用に当たりては医療、福祉、行政の密なる連携要し、国家の方針としていくつもの府省が取り組む事業に育ちたり。